Maternal Behavior and Attitudes and Elementary School Children's Academic Achievements : An Exploratory Research

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47655

母親の態度・行動と小学生のアチーブメント*

—探索的研究¹—

小 嶋 秀 夫

双生児研究の知見によると、子どもの学業成績は、一般に知能より環境の規定性が大きい。しかし、Freeberg & Payne (1967) が子どもの認知発達に対する親の影響に関する研究を総覧している中で、小学生の学業成績を基準とした研究に問題を限って、従来の知見をまとめようとする、それに関する研究が少なく、しかも、一貫した結果が見出されていないことが分る。筆者の眼から見た問題点の主なものをあげると次のようである。

1. 筆者(1963)が区別した、親を記述するさいの記述者の違いと、記述のさいの反応水準の区別は有用であること。記述者の違いを要因として取り上げる研究は殆んどない。また、反応水準に関していうと、意見・態度水準の反応を独立変数とした研究は他の水準での反応を用いた研究と一貫しない結果を生み易いようである。
2. 子どものアチーブメントに影響すると考えられる重要な要因の統制が不十分なこと。例えば、同じ学年内に存在するCAの散ばりが放置されることが多い。また、親の知的能力の統制は困難ではあるが、放置しておくことには問題がある。

わが国での三隅・阿久根(1971)の研究は、親のリーダーシップの型と小学校4・5年生のアチーブメントとの間のポジティブな結果を報告し、実質的に(筆者の解釈によると)M型とオーヴァー・アチーブメントの関係を主張している。しかし、この研究も上述の2の問題をもつほかに、アチーブメントのきめ方に問題があ

る。つまり、高知能児はオーヴァー・アチーブメントたり得ず、低知能児はアンダー・アチーブメントたり得ない。また、親の行動は子どもの知能とも関係するので、学業成績から知能の寄与を引いてしまってから、親の行動の比較をしているのも問題になる。

この研究は三隅ほかの研究の直接のくり返しではないが、類似した対象に重回帰分析法を適用して、今後のこの領域の研究の方針についてなんらかの見通しを得ることを目的としている。アチーブメントと親の行動との関係を詳細に探しておくことは、将来、Wolf (1966) のようなアチーブメントに対する環境要因の広い観点からの分析に発展をもたらすであろうし、この複雑な領域にモデルを立てて、path analysisのような手法を試みる際にも、有効な情報を提供すると考える。

I 方 法

1. 被験者

調査の対象とした小学校は、金沢市の中心部の1校と、金沢市から車で約60分の距離にある郡部の2校で、これらの小学校の地域的背景は、相互にかなり異なっている。それぞれの学校の5年生2クラスずつとその母親を被験者にするにより、ある程度多様性のある被験者が得られたと思う。6クラス183名のうち、のちに述べる子ども側と母親側の資料が完全にそろったのは165名で、この資料を分析の対象とした。

のちに述べるインヴェントリー (CR-PBI)

* 昭和48年9月17日受理

1 この研究にあたり、金沢大学電子計算機 FACOM 230-35 を使用した。

施行時での男児88名の平均年齢は11.2 (SD=0.30), 女児77名のそれも11.2 (SD=0.27)であった。PR-PBI 施行時の母親は平均37.3才 (SD=4.03) で、平均して9.9年 (SD=1.86) の学校教育をうけている。なお、男児の母親と女児の母親とは重なり合いのない、完全に相互独立した標本である。不在の3ケースを除いた父親の平均年齢は40.7 (SD=4.16) で、平均して10.4年 (SD=2.45) の学校教育を受けている。父親 (不在の場合は母親) の職業は、専門的・管理的なものが16.4%, 事務的なものが8.5%, 販売的・熟練的・半熟練的なものが65.5%, 未熟練的職業が9.1%となっており、のこの1ケースが無職となっている。母親の80.6%が家業を含む職業についているか、内職をするかしている。子どもが、一人っ子であるのが全体の5.5%, 二人きょうだいの場合が52.7%, 三人きょうだいが32.1%で、それ以上は9.7%となっている。そして、祖父母の少くとも一方と同居しているのは、全体の54.5%にあっている。全体として、今回の標本は、農村的特徴と都市的特徴が混在した性質をもっている。

2. 手続き

親の行動インヴェントリー(PBI Form 4-A)の構成と施行: 筆者がSchaefer (1965) のインヴェントリーをもとにして、4次にわたって発展させてきたインヴェントリー (PBI) の枠組みを基礎において、子どもに対する親の一般的な態度・行動を測るインヴェントリーを構成した。125項目のうち、80項目は筆者 (1970) の分析した小学校児童と、その親を主たる対象に考えて構成された PBI Form 2-B の10尺度のうち8尺度から来ている。この分析により、PBIにおいては、「そう」といい易い傾向としての acquiescence の分散は無視してもよいと考えられたので、項目の keying の方向のバランスをとった Form 2-B の尺度の false

keyed 項目の方向を元に戻した。この8尺度の名前は、Table 2 の尺度1~8のとおりである。

つぎに、はじめに述べたように、小学生の Achievement の説明にポジティブな結果を報告している三隅ほか (1971) の PM 尺度を代表する20項目¹が採用された。この PM 式親子関係尺度の項目は、一部分、筆者の PBI をも参考にして書かれた (古川, 1972) ののであるが、今回、PBI 類似項目の逆輸入はなるべく避けた。PM 式親子関係尺度は、まだ定まった形式をとらず、研究上の目的に応じて、項目プールから適宜、尺度を構成するという方法がとられている。今回の尺度は、古川 (1972) の Table 1 を参考にして、できるだけ因子的純粋性が高まるように筆者が構成したものであるが、もち論、他の基準により、別の尺度を構成することは可能である。今回の尺度は、構成可能な尺度のうちの一つにしか過ぎない。

最後の25項目は、矢追² (1973) により作成されたもので、これは、筆者のインヴェントリーでは中心的には取り上げていない、子どもの学習に対する親の態度・行動を扱ったものである。しかしながら、これらの項目がカバーしている領域は、その内容がより特定の領域にもかかわらず、基本的に従来の PBI が問題にしてきた領域と重なるもので、その topical variant の一つと考えてよいと思う。

インヴェントリーは、子ども用・親用ともに対応した125項目からなっており、はじめの10尺度に関係する100項目は、10の尺度を循環するように配列してあり、それに学習に関する25項目が続く。各ステートメントが自分 (親用) または自分の母親 (子ども用) に似ている程度を、「ちがう」、「いくらか」、「そう」の3段階で反応を求めるのは、従来の PBI と同じであるので、小嶋 (1971b) などを参照された

1 このための基礎資料を公表まえに快く提供された古川綾子氏に感謝します。

2 今回の研究にあたり、この25項目の提供と、資料の収集に関して、矢追清典氏からうけた多大な協力に感謝します。

い。なお、子どもには記名を求め、親には、子どもの名前のほか、両親の年齢・教育程度・職業・きょうだい・祖父母についての情報を求めた。

インヴェントリーは、子どもに対しては1972年12月に、クラス単位で集団施行した。封筒に入れた母親に対するインヴェントリーの配布と回収は、担任教師と子どもを通して行なった。

子どもの知能の測定：団体式知能検査（日本心理適性研究所編 EIS 小学校知能検査C型）を1971年6～7月に施行した結果¹を利用した。これは、8つの下位検査からなっている。

子どものアチーブメントの測定：国語、社会、算数、理科の4教科について、担任の教師が学年末に判定（5段階）した成績の平均値が、1年～4年までの4年分について算出された。さらに、算数の標準学力検査（日本心理適性研究所編著 小学校領域別診断学力検査3年用）を4年生の1学期（1971年6～7月）に施行した結果¹も併せ利用した。

3. 結果の整理法

PBI Form 4-A：インヴェントリーへの「ちがう」、「いくらか」、「そう」の反応に対して1, 2, 3点を与え、PBIの8尺度とPMの2尺度のそれぞれを10項目尺度として仮の採点をした。尺度の内的整合性をKR20で調べるとともに、項目(125)×尺度(10)のpoint-triserial相関を求めた。そのさい、ある項目とその所属尺度との間では、項目と、それが所属する尺度の他の9項目の合計得点との相関(item-remainder相関)が計算された。この結果をもとにして、尺度を洗練して行くわけであるが、その際、PMの2尺度の内容の性質を変えないために、その20項目は固定した。これは、内的整合性という点からは、PMに対して不公平なやり方であるが、外的基準の弁別に成果を示したPM(三隅ほか, 1971)の内容を変えることは危険であるので、一応の信頼性が確保で

きていることを確かめて、上述の処置を決めたのである。PBIの8尺度については、125×10の項目一尺度相関行列を視察して、ある尺度に属する項目は、尺度内においても、他の尺度との関係においても、残された項目群の中で最良のものを採用するようにした。このとき、必要に応じて、学習に関する親の態度・行動の項目群から採り入れた項目もある。PBIはもともと、学習に直接関係する項目を殆んどもたないが、2で述べたような考えによれば、一つの尺度に2, 3個そのような項目が含まれたとしても問題ないばかりでなく、今回のForm 4-Aのように、子どものアチーブメントと関連づけようとして構成されたインヴェントリーにとって、むしろ望ましいことである。

Item-remainder相関は、ある尺度に属する項目が入れ換ると、まえもって十分に予測できない変化を示すことがあり、上述の目標を達するまでに、子どものデータに関しては3回、親のデータに関しては4回の項目分析を繰返した。結果は、末尾の付録にあるようなもので、尺度3の親子と、尺度6の親を除いて、一つの尺度に1～3個、学習に関する項目が含まれている。ここで触れておく必要があるのは、8～10の尺度を除いて、親用と子ども用の尺度を構成する項目に若干の違いがあることである。うまく書かれた200～300の項目を、代表的な標本に施行できれば、親と子とで完全に対応した項目内容からなる10尺度ほどを構成することは可能であろう。しかし、今回のような105項目(PMの20項目を除く)で、そのような尺度構成を行なおうとすると、PBIがカバーする領域がやせて来て、穴があきかねない。むしろ、現状においては、親、子それぞれにおいて、測ろうとしているコンストラクトを、できるだけうまく測ることをめざして、尺度構成を試みる方が現実的であろう。同じような項目でも、親と子どもにとって、異なった意味をもつ

1 これらの結果を提供された矢追清典氏に、重ねて感謝します。

のは当然である。たとえば、子どもにとって、「わたしをたいへん愛しているという」母親は、受容的だと考えられるが、「子どもに、あなたをたいへん愛しているという」という項目は、親にとっては、「子どものために、どれだけ苦労したかをきかせる」や、「子どもがいうことをきかないと、恩知らずだと思ってしまう」といった項目と共通性（子どもの罪障感に訴えて子どもを統制しようとする傾向）をもつのである。上述の項目分析の過程における項目の移動の際には、このような項目内容も考慮したのである。

採点された尺度得点は計算機により、正規分布をなすT尺度に変換した。この変換は、PBIの尺度水準の因子分析結果には、殆んど影響しなかったが、のちの分析に備えてなされた。

なお、これらのPBIの分析は、男女児をコミにし、165の大きさの標本において行なったが、これには、PBIの筆者の従来の経験から言って、大きな問題はないと考える。

知能：検査は8つの下位検査得点（粗点。検査名は後述する）と1つの知能偏差値を生み出した。下位検査間の相互相関行列を見ると、相関係数は0.23から0.58にわたっているが、共通性を重相関の2乗（Harman, 1967）で推定して行なった因子分析は、意味のある2つまたはそれ以上の因子を生み出さなかった。したがって、下位検査の情報をいくつかの因子得点に凝縮してあらわすことはできなかった。

アチーブメント：1～4年の学年末の成績の相互相関は0.77～0.90の範囲で、1年間隔の場合に平均0.89、2年間隔で平均0.84、3年間隔では0.77と、少しずつ相関が下って行く傾向があるのは当然のことであろう。この4つの成績は、そのまま使用することにした。

算数の標準学力検査の4つの下位検査（数と計算、量と測定、数量関係、図形）間の相関は0.63～0.70という狭い範囲にしか散ばらず、明

らかに一因子構造が見取られたので、全体の学力偏差値のみを用いることにした。

以上の5つの測度から、これらをも含めて合計15のアチーブメントの測度が作られた。これらは、Table 4の測度BからPにあたる。まず、B～Fは、上述の5測度にそのまま対応する。つぎに、G～Kは、単純回帰により、知能偏差値から予測されたアチーブメントの5測度の推定値を、実際のアチーブメントから引いた残差得点である。これは、知能偏差値によつては説明できないアチーブメントの高低、いわゆるオーヴァー・アチーブメント—アンダー・アチーブメントを表わしている。知能偏差値とB～Fの測度との相関は、それぞれ、0.58, 0.59, 0.64, 0.63, 0.65であり、知能検査の施行時点から遠ざかった時点での学業成績でも、相関はそう低くならない。本来なら、知能検査もくり返し行なうべきであろうが、今回は、そのような資料を確保できなかったので、4年生の検査結果だけを用いることにした。4年生の知能検査により、1年から4年までのアチーブメントの分散の約34～42%を説明できる。知能偏差値 X_T から、アチーブメント（ $\hat{Y}$ ）を予測する回帰方程式¹は次のとおりである。

$$1 \text{ 年学年末} : \hat{Y}_{BS} = 0.23X_T + 1.60$$

$$2 \text{ 年学年末} : \hat{Y}_{CS} = 0.22X_T + 1.60$$

$$3 \text{ 年学年末} : \hat{Y}_{DS} = 0.25X_T + 0.25$$

$$4 \text{ 年学年末} : \hat{Y}_{ES} = 0.24X_T + 1.14$$

$$4 \text{ 年算数学力} : \hat{Y}_{FS} = 0.84X_T + 12.96$$

最後に、L～Pは、重回帰により、知能検査の8つの下位検査成績（粗点）に基づいて予測されたアチーブメントの5測度の推定値を、実際のアチーブメントから引いた残差得点である。各個人のオーヴァー・アチーブメント—アンダー・アチーブメントの程度を決めようとするれば、大まかな知能偏差値よりも、より分析的な下位検査の情報を利用する方が適切であるのは

1 便宜上、学年末成績は4教科の成績の平均でなく、合計で示されている。

いうまでもない。異なった学年の、あるいは異なった教科の成績に対して、子どもの知能の諸側面が、異なつた寄与を示すことは、当然予想できる。ただし、今回使用した知能検査の下位検査は相互に冗長であり、また、下位検査の信頼性は知能偏差値の信頼性よりも低いと予想されることも関連して、重回帰による予測の効率は、それほどよくない。B～Fの測度のそれぞれを基準変数とし、知能検査の8つの下位検査を予測変数とした重回帰係数はそれぞれ、0.68、0.70、0.74、0.72、0.74となっている。これはいずれも、知能偏差値と基準との単純相関係数を0.1ほど上まわっている。下位検査は、置換、数系列完成、文字弁別、数象計算、同意語反意語、空間分析、語句完成、図形構成の順になっている。これらに基づき、B～Fのアチーブメントの5測度を予測する際に、下位検査得点(粗点)にかけられるベクトル b (偏回帰係数)の各要素と定数項とは次のようである。なお、学年末成績は4教科合計である。

- 1年学年末：-0.01, 0.29, -0.07, 0.11, 0.15, 0.06, 0.22, 0.28 ; 3.00
 2年学年末：0.01, 0.25, -0.15, 0.15, 0.25, 0.03, 0.19, 0.29 ; 2.96
 3年学年末：0.00, 0.23, -0.12, 0.22, 0.19, -0.02, 0.23, 0.31 ; 2.39
 4年学年末：0.03, 0.24, -0.11, 0.23, 0.26, -0.01, 0.16, 0.21 ; 2.72
 4年算数学力：-0.08, 0.96, -0.36, 0.96, 0.81, 0.46, 0.32, 0.77 ; 18.93

β 係数(標準偏回帰係数)により考えると、アチーブメントの5測度を通して、一貫した寄与を示すのは数系列完成で、これは古くスピアマンが相関物の抽出と呼び、精神測定的知能の本質とも考えられるものと関係しているかも知れない。寄与の量はそれほどでないが、同意語反意語も似た傾向を示している。1年生から4年生まで、だんだんとアチーブメントに対する寄与が増してくる傾向を示すものは、数象計算である。 β 係数は、1年生から4年生までの学

年末成績に対して、0.11, 0.17, 0.24, 0.26となり、4年生の算数学力検査に対しては0.32となっている。数象計算は、たとえば、

| は 1, - は 5 というような対応を知って、

| .. -... は、 $1 \times 2 + 5 \times 3$ を表わす

という約束を導入し、答(17)を求めるという新奇でかなり複雑な課題になっている。検査用紙では、記号と数字とのコード表(この対応にも、ある規則性がある)は、問題の印刷してある頁の前にあり、忘れたらめくって見てもよいことになっている。この課題に早く正答を出すためには、少くとも、コード表を学習する能力と計算能力が必要である。語句完成と図形構成とは、4年生になって寄与が低まる傾向が見られる。残りの置換、文字弁別、および空間分析の β 係数は一貫して低い。これらの結果を解釈する際には、下位検査間の相互相関のほか、学校での教育内容や評価法を考慮に入れる必要があるし、また、今回の資料には欠けている低学年での知能検査成績の情報が必要なのはいうまでもない。

これまで述べてきたG～Pの10の測度は、 $Y - \hat{Y}$ の形をとる差得点で、しかも、 Y と $\hat{Y}$ の相関は高いので、その信頼性がかなり低下するものと考えておく必要がある。

4. 結果の分析法

まず、インヴェントリー PBI の因子構造を知るために、子どもの報告と母親の報告のそれぞれについて因子分析を行なう。さらに、対応した子どもの報告と母親の報告に共通した因子を知るために、Tucker (1958)の手続きによるカノニカルなバッテリー間因子分析を行なう。ここでの知見は、つぎの重回帰分析の結果の解釈にも役立つかも知れない。

つぎに、アチーブメントの5測度(B～F)を基準変数とした重回帰分析を行なう。ここでの予測変数は、PBIの10尺度のほかに、子どもの性別、年齢、母親の教育程度、家庭の職業、および、子どもの知能(偏差値)である。PBIは子どもの報告による場合と母親の報告による

場合とがあり、また、残りの予測変数のバッテリーの中に、知能を含める場合と含めない場合とに分けたため、結局20回分析がなされた。この分析は、男女児コミにしてなされた。しかしながら、母親の態度・行動が子どものアチーブメントに対してもつ影響は、子どもの性別と交互作用をもつ場合があるので、男女児別の分析が必要になる。今回も、そのような分析を行なったが、予測変数の数（男女児コミの分析の時

より1個減って、13ないし14) に対して標本の大きさ(88と77) が小さいので、 β 係数がかなり動揺すると考えられる。したがって、男女児別の分析結果は、男女児コミの分析結果と比較するための一つの参考資料として扱うことにする。ここでの分析において、基準変数として、アチーブメントの5測度を取りあげ、 $Y - \hat{Y}$ という形の、知能の要因の効果を除いた10測度は省いた理由は、はじめに述べたとおりである。

Table 1 Item-remainder point-triserial correlations, KR 20 reliabilities, means, and standard deviations for PBI Form 4-A raw scale scores

Scale Item	Child (N=165)										Mother (N=165)									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1	.48	.24	.49	.46	.42	.29	.38	.45	.36	.09	.37	.35	.38	.43	.24	.43	.29	.41	.21	.11
2	.53	.24	.48	.38	.52	.31	.45	.60	.37	.17	.47	.29	.56	.36	.30	.62	.25	.52	.26	.25
3	.68	.41	.39	.44	.32	.42	.52	.51	.54	.41	.53	.43	.35	.31	.26	.54	.35	.45	.22	.40
4	.57	.44	.37	.35	.50	.53	.56	.54	.47	.41	.51	.40	.55	.44	.32	.46	.38	.55	.31	.36
5	.64	.39	.38	.38	.51	.39	.51	.59	.58	.35	.43	.34	.51	.27	.34	.50	.34	.52	.39	.36
6	.52	.26	.42	.31	.44	.54	.42	.53	.37	.39	.51	.43	.39	.42	.49	.52	.39	.59	.20	.19
7	.63	.52	.43	.28	.66	.33	.48	.43	.44	.41	.47	.29	.46	.50	.22	.51	.34	.48	.36	.24
8	.63	.51	.44	.35	.33	.38	.36	.47	.47	.33	.41	.26	.40	.42	.36	.54	.28	.51	.28	.50
9	.56	.40	.47	.38	.41	.34	.52	.37	.45	.41	.45	.47	.59	.43	.44	.46	.27	.33	.21	.50
10	.60	.27	.50	.38	.48	.39	.48	.59	.54	.42	.48	.21	.53	.38	.23	.47	.29	.47	.40	.25
r_{tt}	.87	.71	.77	.71	.79	.73	.79	.82	.79	.68	.79	.68	.80	.74	.66	.82	.65	.81	.60	.65
Mean	20.7	17.5	13.1	18.8	21.7	16.0	14.9	16.9	23.2	22.9	25.5	17.8	14.7	20.5	22.9	17.0	14.9	21.7	25.3	24.5
SD	4.79	3.63	3.03	3.73	3.97	3.66	3.73	4.53	3.90	3.48	3.33	3.36	3.72	3.52	3.01	4.38	3.17	4.05	2.53	2.90

最後に、PBIとアチーブメントとの関係を、大雑把な尺度水準でなくて、項目水準にまで下って探ることにする。そのとき、アチーブメントの測度B～Pの15箇と、知能(A)の合計16の測度を取りあげ、125項目のそれぞれの項目反応との相関を調べることに決めた。

II 結果と考察

1. PBIの信頼性

Table 1に、項目と尺度の item-remainder 相関、信頼性、それに尺度(粗点)の平均と標準偏差とが示されている。尺度1～8は今回の標本で内的整合性を高めるような項目選択がなされたから、信頼性は10項目尺度としては、相当高くなっている。しかし、親の方の尺度2, 5, 7は信頼性がやや低い。これらは、(2)極端なほど自律を容認する、(5)子どもを個別的的存在として受け容れる、(7)関心をもたず、無視するというように、統制の弱さという共通性をもった尺度である。これらの項目内容に対して、親は子どもよりも、微妙な、分化した解釈をすることが、内的整合性を低めたと考えられる。今回の標本での項目分析結果による項目選択の恩恵を受けていないことが、とくに親の尺度9の信頼性に影響している。親の尺度9の分散の小ささは、得点分布の負の歪みによるのではないことは、尺度1と比較すれば分る。筆者(1968, 1971a)の経験では、愛情に関する尺度の内的整合性はたいていいつも高かったが、今回の親の尺度9は、これに反するケースである。なお、巻末の項目リストを参照すると分るように、101番以降の項目番号をもつ、学習に関する項目の item-remainder 相関は、他の項目のそれと大差なく、手続きの項で述べた筆者の考えを裏書きしている。ただし、PBIの8尺度のすべてに対応する学習に関する項目群を準備した上での結果でないから、決定的なことはいえない。いずれにせよ、今回の10尺度の信頼性は、少なくとも研究の目的で使用できるだけはあるといえる。

2. PBIの因子構造

子どもと母親のそれぞれのPBI尺度得点(T)は、子どもの性別と有意な相関をもたないこと

が分っている。Table 2の左半分は、子どもと母親のそれぞれについて見出されたバッテリー内因子で、共通性の推定値としては、その変数を除いたバッテリー内の他の変数に基いた重相関係数の2乗が用いられた。Varimaxは、子どもの行列と母親の行列とは、やや異なった挙動を示した。すなわち、母親では、第I因子の分散の一部が、第II因子に分配された。これは2因子解や4因子解でも起った。また、母親の第III因子は、3因子解でも4因子解でも、分散の分配をうけなかった。

第I因子は筆者の従来第II因子である**受容—拒否**と同じである。ここでの受容は、子どもとの接触、子どもの情緒の支え、あるいは、子どもの尊重といった内容、つまり、子どもに対する配慮が中心になっているので、その対極には積極的な拒否(尺度3)よりも、無視・無関心(尺度7)が来る。ただし、母親の尺度7は、他の2因子とも相関している。このバッテリー内でいう限り、三隅ほか(1971)のいうMは、上記のような意味での受容に他ならない。

第II因子は、子どもと母親とで、尺度10(P)に少しの相違が認められることを除けば、筆者が従来バッテリーで第I因子として見出してきた**心理的統制**であることは明白である。

第III因子は、筆者の従来第III因子を代表する尺度が1つしかバッテリーに入っていなかったことと、Varimaxの挙動とがからみ合って、子どもと母親とに共通した解釈を下すことはできない。仮にいうと、子どもでは、**ゆるい統制—きつい統制**であり、母親では**ゆるい統制**になるが、その意味は、子どもの場合とはいくらかずれている。しかし、従来因子IIIに、かなり近い可能性があり、新しいバッテリーで検討してみる必要がある。

バッテリー間の対応した尺度の相関を調べると、尺度4, 5, 6が5%水準で有意に達しなかった。なかでも尺度6では-0.02とまったく相関が認められなかった(他の2尺度は10%水準で有意)。尺度6は、バッテリー内ではそれぞれ心理的統制を代表する尺度の一つであったが、親子の間での共変動は認められないのである。これは、項目そのものの違いによるので

Table 2 First three varimax rotated within- and inter-battery PBI factors for child and mother

Scale	Within-battery factor				Inter-battery factor			
	I	II	III	h ²	I	II	III	h ²
1 Acceptance.....	.86	.07	.00	.75	.41	-.04	-.07	.17
2 Extreme Autonomy.....	.11	-.03	.63	.42	.16	-.01	.43	.21
3 Rejection.....	-.43	.61	-.02	.56	-.24	.26	-.00	.13
C 4 Hostile Control.....	.13	.62	-.52	.67	.08	.14	-.24	.08
H 5 Acceptance of Individuation.....	.83	.26	.06	.76	.49	.15	.04	.26
I 6 Control through Guilt.....	.07	.71	-.09	.52	.19	.07	-.06	.05
L 7 Hostile Detachment.....	-.71	.24	.11	.58	-.33	.10	.20	.16
D 8 Intrusiveness.....	.39	.40	-.54	.60	.24	.14	-.28	.15
9 Maintenance (PM).....	.85	.01	-.05	.73	.45	.05	-.10	.21
10 Performance (PM).....	.10	.54	-.50	.56	.02	.56	-.09	.32
Contribution of factor	3.06	1.85	1.24	6.14	.90	.46	.39	1.74
1 Acceptance.....	.79	.17	-.04	.65	.43	.04	.08	.19
2 Extreme Autonomy.....	.05	-.04	.44	.20	-.17	-.18	.49	.30
3 Rejection.....	-.30	.49	.27	.40	-.38	.26	.10	.22
M 4 Hostile Control.....	.13	.77	.02	.61	.11	.35	-.23	.18
O 5 Acceptance of Individuation.....	.70	.26	.06	.56	.18	.24	.05	.10
T 6 Control through Guilt.....	.18	.72	.08	.56	.01	.06	.21	.05
H 7 Hostile Detachment.....	-.48	.26	.36	.42	-.52	.13	.14	.31
E 8 Intrusiveness.....	.28	.56	-.16	.41	.33	.23	-.06	.17
R 9 Maintenance (PM).....	.75	.26	.10	.63	.34	.06	.11	.13
10 Performance (PM).....	.19	.78	-.05	.65	-.03	.30	-.01	.09
Contribution of factor	2.16	2.51	.45	5.11	.90	.46	.39	1.74

Note.—Raw scale scores were converted to T scale scores so as to normalize the distribution. In within-battery analyses, communalities were estimated by the squared multiple correlation. Two corresponding inter-battery factor matrices were rotated combinedly as one matrix with 20 variables and three factors.

はない。10項目中8項目は、親—子に共通である。考えられることは、子どもに「恩着せがましい親だ」と感じさせるほどの親の中に、自己洞察かフランクさに欠ける親があるのか、あるいは、小学生の認知に限界があるのかである。筆者による中学生とその親の分析では、この尺度（項目は若干異なる）はたいてい有意な相関を示していた。

Table 2の右半分はバッテリー間因子である。第I因子は**受容—拒否**で、親子とも尺度8の相関が相対的に高まったことと、親の尺度5の相関が低まったことが、バッテリー内因子と

の違いである。第II因子は、上述の尺度6と親の尺度4の問題はあるが、やはり**心理的統制**である。第III因子は、尺度2と4とが親子で対称的な負荷を示す点に注目すると、**ゆるい統制—きつい統制**と言ってよい。このように、結果の対称性にはやや欠けるが、小学校5年生とその母親でも、親の行動を記述する共通の枠組みの存在が認められるといえる。

3. 子どものアチーブメントの重回帰分析
知能と学年末成績の性差はないが、算数学力では女兒がやや劣っていた。また、年齢差を調整する知能は別として、4年生になってもアチ

ーブメントに年齢差がある。アチーブメントの性差や年齢差は、Table 3のβ係数にも現われている。この表の列は基準となった5つのアチーブメントで、この順でTable 4のB~Fに対応している。Rはすべて、少くとも0.5%水

準で有意である。

知能を予測変数に加えない場合、母親の教育年数が正の寄与をしている。子どものPBI尺度では、6の負の寄与が目立つ。尺度1の負の、および尺度5と8の正の寄与は、学年が後

Table 3 Beta weights and multiple R's for child's achievement measures

Criterion variable Predictor variable	Grade-point average for four subjects ^a								Standard test of arithmetic 4th grade	
	1st grade		2nd grade		3rd grade		4th grade			
Sex of the child (Girl).....	-.02	-.02	-.01	-.01	-.07	-.06	-.02	-.02	-.17	-.17
Child's age in months	.28	.33	.32	.36	.24	.28	.24	.28	.18	.23
Mother's education in years.....	.16	.05	.22	.11	.26	.14	.18	.06	.22	.10
Occupational class (Low).....	-.10	-.06	-.07	-.03	-.05	.00	-.12	-.07	-.09	-.04
1 Acceptance.....	-.19	-.18	-.13	-.12	-.08	-.06	-.10	-.08	-.02	-.01
2 Extreme Autonomy.....	.02	.01	-.04	-.05	-.05	-.06	-.05	-.06	-.00	-.01
3 Rejection.....	.04	.02	.09	.07	.01	-.01	.08	.06	.08	.06
4 Hostile Control.....	-.06	-.00	-.01	.05	-.04	.02	-.07	-.01	-.03	.03
5 Acceptance of Individuation	.16	.14	.18	.15	.16	.13	.11	.09	.06	.03
6 Control through Guilt.....	-.23	-.16	-.27	-.20	-.20	-.12	-.24	-.16	-.23	-.15
7 Hostile Detachment.....	-.03	.09	-.02	.09	-.07	.05	-.08	.04	-.12	.00
8 Intrusiveness	.17	.15	.11	.08	.06	.03	.12	.09	.01	-.02
9 Maintenance (PM)	.01	.09	.05	.13	-.01	.08	.09	.18	.08	.17
10 Performance (PM)	-.01	-.04	-.13	-.16	-.10	-.14	-.12	-.16	-.09	-.12
Intelligence of the child	—	.56	—	.57	—	.60	—	.60	—	.62
Multiple R	.48	.71	.52	.75	.48	.74	.49	.75	.47	.75
Sex of the child (Girl).....	-.00	-.01	.02	.01	-.04	-.04	.02	.01	-.13	-.13
Child's age in months	.30	.36	.32	.38	.23	.30	.25	.31	.17	.23
Mother's education in years	.19	.06	.24	.11	.26	.12	.17	.03	.18	.04
Occupational class (Low).....	-.10	-.03	-.06	.01	-.06	.01	-.14	-.06	-.14	-.06
1 Acceptance.....	.08	-.05	.10	-.02	.15	.02	.00	-.13	.11	-.02
2 Extreme Autonomy.....	.03	-.04	-.02	-.10	-.05	-.13	.01	-.08	.06	-.03
3 Rejection.....	.03	.12	-.05	.04	-.03	.07	-.03	.07	-.06	.03
4 Hostile Control.....	-.23	-.05	-.23	-.05	-.22	-.03	-.17	.03	-.18	.02
5 Acceptance of Individuation.....	-.03	-.01	-.04	-.02	-.03	-.01	-.00	.02	.01	.03
6 Control through Guilt	-.01	-.07	.03	-.04	.09	.02	.04	-.03	.05	-.02
7 Hostile Detachment.....	-.01	-.03	-.02	-.03	.01	-.01	-.07	-.08	-.05	-.06
8 Intrusiveness	.16	.09	.15	.08	.13	.06	.24	.17	.08	.00
9 Maintenance (PM)	-.16	.01	-.12	.06	-.18	.01	-.20	-.01	-.29	-.09
10 Performance (PM)	.19	.04	.17	.02	.07	-.09	.06	-.10	.16	-.01
Intelligence of the child	—	.58	—	.59	—	.63	—	.63	—	.64
Multiple R	.46	.70	.49	.72	.46	.73	.47	.74	.43	.72

^a Language, social studies, arithmetic, and science.

になると僅かながら減じるように見える。母親の PBI 尺度では 4 と 9 とが負に寄与し、8 が正の寄与を示している。なお、男女児別の分析で、ほぼ一貫して、子どもの尺度 1 と 10 とが、男児に負、女児に正の寄与をしていることが分かった。

知能を予測変数に加えると、その寄与により重相関係数は大巾に上昇する。しかし他方で、母親の教育年数¹、家庭の職業、子どもの尺度 6、母親の尺度 4、8、9 の寄与が低下する。母親の教育年数と家庭の職業とは、遺伝的にも環境的にも子どもの知能と相関し、子どものアチーブメントに対する寄与にも重なり合う部分があることが、この 2 変数の寄与の低下に結びついていると推測される。PBI 尺度については、母親では 4、8、9 の尺度の寄与が一樣に低下するのに対して、子どもでは寄与が低下する尺度とそうでないものがあるが、この解釈は直ちにはできない。

尺度は変るが、子どもの 1 と母親の 9、子どもの 6 と母親の 4 というような、受容または心理的統制を純粹に測る尺度の寄与が負であり、両因子に負荷する尺度 8 が算数を除いて正の寄与を示すのは偶然であろうか。今後の検討を要する。

子どもの PBI 尺度で、因子的に接近した尺度 1 と 5 とが低学年のアチーブメントに逆方向の寄与を示していることは、suppressor 変数の問題のように思えない。筆者(1971b)が指摘したように、重回帰問題で予測変量間の相関をもとにして予測変量の合成をはかることは、情報のロスを導く可能性があり、検討を要する問題だと思う。なお、これまで使って来た寄与ということだが、因果性については何も言及していないことはいままでのない。

4. 項目と基準との相関²

Table 4 の列は A (知能) を除いて、結果の整理法の項で述べたアチーブメントの測度である。もし親の行動が子どものアチーブメントだけでなく知能とも関係するとすれば、アチーブメントの分散から知能によって説明できる部分

を引き去ることは、親の行動とアチーブメントとの関係を正当に評価することを妨げること、および、差得点の信頼性の問題を、G~P の測度もっていることに留意しなければならない。

まず、知能を除いて、子どもの項目反応の方が母親のそれより基準との相関を多くもつこと、そして、子どものアチーブメントに対して知能の統制を試みると、有意な相関の数は減ることが見取れる。

それぞれのマス目の中の符号で、相互に矛盾することが殆んどないことは、筆者(1971b)のいうように、基準変数の予測を、内的整合性を高める方向で構成された尺度の水準で考えてよいことを示していると思う。基準との有意な相関をもつような項目の内容の共通性を吟味し、その項目群を中心とした尺度(できれば、尺度間の独立性の高いもの)を構成して行くこと、しかも、交叉妥当化を行なうことが、今後のこの領域での探索に重要であろう。

最後に、PM の 2 尺度に言及しておく。三隅ほか(1971)とこの研究とは、変数の統制、親の変数の捉え方(類型的:特性的)、知能検査(B:C)、被験者(都市:郡部+都市)など、重要な多くの点で違いがある。しかし、本研究の 4 年学年末の成績を知能も含めた予測変数群で説明しようとするとき、子どもでは M が 0.18 の β を示しており、因子的に類似した尺度 5 より寄与が大である。しかし、子どもの P は尺度 6 と同じように -0.16 の β となっている。一方、親の M は寄与が小さい。したがって、子どもの報告に限っていうと、今回取り上げられた他の変数の効果を一定に保つと、M が正、P が負の寄与を示すが、諸要因の効果を統制したグループ比較で、M の要因が三隅ほか(1971)の結果ほどきれいに効くかは不明である。

III 要約と結論

5 年生 165 名とその母親に、子どもに対する態度・行動を調べるインヴェントリーを施行し、子どもの現在までのアチーブメントを、重

1 父母の教育年数の相関は 0.60 (N=162) であった。

2 尺度に所属しない項目は、スペースの関係で表から省いた。

回帰的に説明しようとした。子どものアチーブメントに対して、知能が大きな寄与を示すほかに、従来の研究で無視されることが多かった子どもの年齢と母親の教育年数の寄与が認められた。インヴェントリーの尺度では、親子とも、心理的統制を純粋に測る尺度の一部が負の寄与を示した。受容を純粋に測る尺度の一部が負の寄与を示す反面、因子的に類似した別の尺度が正の寄与を示すこともあった。このことから、予測変数の内部構造に基く単純な合成の問題点が再確認された。

標本の大きさの関係で補足的にしかなわなかった性別の分析は重要である。また、今回取り上げなかった子どもの人格要因（これと親の行動の効果は交互作用をもつと考えられる）と初期経験、および、学校での教育と評価の要因を今後取り上げる必要がある。これらのますます複雑化する関連を探究する際に、研究の企画と結果の分析を導びくための理論的モデルが要請される。

引用文献

- Freeberg, N.E., & Payne, D.T. Parental influence on cognitive development in early childhood: A review. *Child Development*, 1967, **38**, 65-87.
- 古川綾子 親の自己認知と子どもの認知による子どもに対する両親のリーダーシップ行動測定について 実験社会心理学研究 1972, **12**, 41-52.

Harman, H.H. *Modern factor analysis*. (2nd ed.) Chicago: University of Chicago Press, 1967.

Kerlinger, F.N., & Pedhazur, E.J. *Multiple regression in behavioral research*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1973.

小嶋秀夫 親子関係の心理学的分析 京都大学教育学部紀要 1963, 9, 125-144.

小嶋秀夫 対人的態度・行動の記述の法則性—愛情と統制の2次元に関して— 日本心理学会第32回大会発表論文集 1968, 473.

小嶋秀夫 親の行動インヴェントリー (PBI) の検討—Balanced Scales— 金沢大学教育学部紀要 人文・社会・教育科学論 1970, 19, 129-144.

小嶋秀夫 親の態度・行動に関する質問紙の構成 日本心理学会第35回大会発表論文集 1971, 399-400.

(a)

小嶋秀夫 幼児の知的機能とインヴェントリーで測った母親の態度・行動 金沢大学教育学部紀要 教育・人文・社会科学編 1971, 20, 29-44.(b)

三隅二不二・阿久根 求 両親の指導性が児童の学業成績、テスト不安と適応性に及ぼす効果 教育社会心理学研究 1971, **10**, 157-168.

Schaefer, E.S. Children's reports of parental behavior: An inventory. *Child Development*, 1965, **36**, 413-424.

Tucker, L.R. An inter-battery method of factor analysis. *Psychometrika*, 1958, **23**, 111-136.

Wolf, R. The measurement of environments. In A. Anastasi (Ed.), *Testing problems in perspective*. Washington, D.C.: American Council on Education, 1966. (Kerlinger, F.N., & Pedhazur, E.J., 1973 による)

矢追清典 学業不振と要因に関する研究(II)—母親の態度・行動とのかかわりについて—石川県教育研究所紀要 1973 第65集.

付録 PBIの項目リスト¹

わたしのおかあさんは

1 Acceptance

1. わたしといっしょに、外出や旅行をするのがすきだ。
21. わたしの心配ごとを聞いてくれるので、わたしの気持ちが楽になる。
31. わたしと話し合いをするのがすきだ。
41. わたしをたいへん愛しているという。
51. わたしが悲しんでいるときには、げんきづけてくれる。
61. わたしがとてもよい子どもだという。

1. 子どもといっしょに、外出や旅行や訪問をするのが好きだ。
21. 子どもの心配事を聞いて、気持ちを楽にしてやる。
31. 子どもと話し合いをするのが好きだ。
51. 子どもが悲しんでいるときは、元気づけてやる。
55. 子どもにとって、話しやすい親であるようだ。
71. 子どもといっしょにものごとをするのが好きだ。

1 左は子ども用、右は母親用で、項目分析の結果構成された尺度の項目番号と項目とを示している。

71. わたしといっしょにものごとをするのがすきだ。
 81. わたしのなやみや心配ごとを理解している。
 109. テストの成績がわるかったりすると、はげましてくれる。
 121. テストの成績が悪かったりすると、なぐさめてくれる。

81. 子どもの悩みや心配事を理解している。
 91. 子どもにたびたび話しかける。
 109. テストの成績が悪いときなど、はげますようにしている。
 121. テストの成績がわるくしょげているときなぐさめてやっている。

2 Extreme Autonomy

2. わたしのおかねは、すきなように使わせてくれる。
 12. わたしが出かけるときに、なん時に帰ってきないなどとはいわない。
 22. すきなだけ、なん回でも、外出させてくれる。
 32. わたしの行きたいところへ、なにもきかないで行かせてくれる。
 42. わたしがのぞむとおりの自由を与えてくれる。
 72. 夜でもわたしが行きたいときは外出させてくれる。
 82. わたしが学校から帰ってからの時間を、すきなようにすごさせてくれる。
 92. したいことは、なんでもさせてくれる。
 103. 勉強のことは、わたしの自由にさせてくれる。
 123. 学校からの帰りがおそくなったりしてもおこったりしない。

2. 子どものお金は、好きなように使わす。
 12. 子どもが出かけるときに、なん時に帰って来ないなどとはいわない。
 22. 子どもの好きなだけ何回でも外出させる。
 32. 子どもの行きたいところへ、なにも聞かず行かせてやる。
 42. 子どもが望むままの自由を与えている。
 52. 服そうは、子どもの好きなようにさせている。
 72. 夜でも子どもが行きたいときは外出させてやる。
 82. 子どもが学校から帰ってからの時間は、好きなようにすごさせてやる。
 92. 子どものしたいことはなんでもさせている。
 123. 学校からの帰りがおそくてもあまりおこったりしない。

3 Rejection

3. たいてい、わたしがしたことにもんくをいっている。
 13. 子どもなんかないほうがよかったと思っていることがある。
 23. わたしのことを、こんな子どもでなかったらよかったのと思っている。
 33. まるでわたしがじゃまものであるかのようなそぶりを見せる。
 43. わたしの考えは、ばかげたものだと思っている。
 46. わたしのしたことで気を悪くする。
 53. わたしがちょっとしたことをしても、ふきげんになり、はらをたてる。
 63. わたしは愛されていないのだという感じをうける。
 83. わたしのことをいらいらさせる子どもだともんくをいう。
 93. わたしのことを困った子どもだという。

3. たいてい子どもがしたことにもんくをいう。
 4. 子どもがうちの手伝いをしないと、つかうことになる。
 13. 子どもなんかないほうがよかったと思うことがある。
 23. もう少しちがった子どもだったらよいのと思うことがある。
 33. 子どもがじゃまになるような、そぶりを示すこともある。
 46. 子どものしたことで気を悪くする。
 53. 子どものしたことでふきげんになり、腹をたてることもある。
 63. 子どもに自分は愛されていないのだという感じを与えているようだ。
 83. いらいらさせる子どもだと文句をいう。
 93. 子どもに、あなたは困った子どもだという。

4 Hostile Control

14. わたしがどんなふうに行動したらよいかを、いつもいいきかせる。
 24. わたしの仕事をどんなふうにしたらよいか、きちんといいいきかせる。
 34. わたしのあいている時間を、どのようにすごしたらよいかをいいきかせる。

14. 子どもに、どんなふうに行動したらよいかをいつもいいきかせている。
 24. 子どもに仕事をどんなふうにしたらよいかを、きちんといいいきかせる。
 34. 子どもに、あいている時間をどのようにすごしたらよいかをいいきかせる。

44. どんなときでも、わたしがすることをさしずしたがる。
54. することを、ちゃんとしてしまうようにとうるさくいう。
64. わたしがいつけどおりにするまで、わたしをせめてたておちつかせてくれない。
74. わたしのすることは、なんでも親の考えどおりさせようとする。
84. いつもわたしのきょうぎや、せいしつを変えていこうとする。
105. いつも勉強しなさいとやかましくいう。
120. 宿題をしたかどうか、いつもきく。

44. どんなときでも、子どもがすることをさしずしたい。
54. することをちゃんとしてしまうように何回もいう。
64. 子どもがいつけどおりするまで子どもを責めたてがちである。
74. 子どものすることは、できるだけわたしの考えどおりにさせたい。
84. いつも子どもの行動や性質を変えていこうとする。
105. いつも勉強しなさいといいきかせている。
110. 成績が悪いときなど、ゆだんしたりなまけたりしないようにいいきかせる。

5 Acceptance of Individuation

5. わたしのももの考えかたを理解しようとする。
35. わたしといっしょに読んだ本のことを、話し合うのがすきだ。
45. 親の考えより、わたしの考えのほうがよいとわたしが思えば、そのことをいわせてくれる。
55. 話しやすい。
65. わたしが学校で勉強していることに、たいへんきょうみをもっている。
75. わたしにとって、友だちがたいせつなものだということを知っている。
85. いつもわたしの考えや意見をきいてくれる。
94. わたしに自分でものごとを決めさせてくれる。
95. わたしがなんでも感じたままを親にいうように望んでいる。
108. 学校でのできごとなど話すと、喜んできいてくれる。

5. 子どもの、もののみかたを理解しようとする。
11. よく子どもをほめる。
15. なにをするかを決めるときは、できるだけ子どもに選ばす。
35. 子どもといっしょに読んだ本のことを話し合うのが好きだ。
65. 子どもが学校で勉強していることに、たいへん興味をもっている。
85. いつも子どもの考えや意見をきく。
95. 子どもがなんでも感じたままをわたしにいうように心から望んでいる。
108. 学校でのできごとなど話すときは、できるだけ興味をもってきいてやる。
114. 勉強のしかたのことなどでよく話しあうことがある。
124. 参考書などはできるだけ買ってやるよう気をつけている。

6 Control through Guilt

4. わたしがうちのことで手伝いをしないと、かっとなる。
16. 親を愛しているのなら、親がのぞんでいるとおりにしなければいけないという。
26. わたしがいうことをきかないと、恩知らずだと考える。
36. これまで、わたしのためにしてきたことをなからなまでにいいきかせる。
56. ほんとうに親のことを思っているなら、親を困らせるようなことはできないはずだという。
66. わたしのために、どれだけ苦労したかをきかせる。
76. わたしが親の望みどおりしないと、いろんなことをしてやったのに感謝の気持ちがないという。
86. 親を愛するのは子どもとしてあたりまえのことだという。
96. わたしが親を愛していることを示さないと気を悪くする。
110. 成績がわるいとゆだんしたりなまけたりしているからだといっておこる。

6. 子どもが、わたしのすすめたとおりにしないと、いい気持ちがない。
16. 親を愛しているのなら、親が望んでいる通りにしなければいけないという。
26. 子どもがいうことをきかないと、恩知らずだと思ってしまう。
36. 子どものためにしてきたことを、いろいろ話してきかせる。
41. 子どもに、あなたをたいへん愛しているという。
56. ほんとうに親のことを思っているなら、親を困らせるようなことはできないはずだという。
66. 子どものために、どれだけ苦労したかをきかせる。
76. わたしの望みどおりに子どもがしないと、いろんなことをしてやったのに感謝の気持ちがないといってしまう。
86. 親を愛するのは、子どもとして当然のことだという。
96. 子どもが親を愛していないことがわかると、気を悪くする。

7 Hostile Detachment

7. わたしが助けてほしいときに、助けるのをわすれている。 27. うちや学校で、わたしがよい行ないをしていても気づかない。 37. わたしのことに、きょうみをもっていないようだ。 47. わたしのことを考えてくれることは、あまりないようだ。 57. わたしといっしょにものごとをするのが、すきではないようだ。 67. おくりものや、みやげものをくれることはめったにない。 73. わたしにたいして、あまり思いやりがない。 77. わたしがほしがっているものを、くれるのをわすれる。 87. わたしがほしがっているものを知らないようだ。 122. 学校や勉強のことを話しても、真げんに聞いてくれない。	7. 子どもが助けを必要としているときに助けるのを忘れる。 27. うちや学校で、子どもがちゃんとしていても気づかない。 37. 子どものことに、きょうみがもてない。 47. 子どものことを考えることはあまり多いほうではない。 57. 子どもといっしょにものごとをするのはあまり好きでない。 73. 子どもに対してあまり思いやりがないほうだ。 77. 子どもが欲しがっているものをやるのを忘れる。 97. 子どもとあまり話をしないほうだ。 117. 勉強しているときでも、つい手つだいをさせることがある。 122. 学校や勉強のことなどゆっくり聞いてやれないでいる。

8 Intrusiveness

8. わたしがどこでなにをしているかを、ちゃんと知りたがっている。 18. わたしが学校や遊びでなにをしていたかを、いつも知ろうとする。 28. わたしがよい友達とつきあっているかを、たしかめようとする。 38. 外でのできごとを、なんでも話さないという。 48. わたしが外でだれといっしょにいたかを知りたがる。 68. わたしが友だちとなにを話し合っていたかを、こまかくたずねる。 78. わたしに電話や手紙がくると、だれがどんなことをいってきたのかを知ろうとする。 88. わたしがひみつにしていることを知ろうとする。 98. わたしの机の中をかってにしらべる。 106. 学校でどんな勉強をしたか、くわしく知ろうとする。	8. 子どもがどこでなにをしているかを、ちゃんと知っておきたい。 18. 子どもが学校や遊びでなにをしていたかをいつも知ろうとする。 28. 子どもがよい友だちとつきあっているかを確かめる。 38. 外でのできごとを、なんでも話さないという。 48. 子どもが外でだれといっしょにいるかを知っておきたい。 68. 子どもが友だちとなにを話し合っていたかをくわしくたずねる。 78. 子どもに、電話や手紙がくると、だれがどんなことをいってきたかを知っておこうとする。 88. 子どもがひみつにしていることでも、知ろうとする。 98. 子ども机のなかを調べる。 106. 学校でどんな勉強をしてきたか、きくようにしている。

9 Maintenance (PM)

9. なにかよいことをしたり、作ったものがよいとほめてくれる。 19. わたしの味方になってくれる。 29. 家庭を明るく楽しいものにしようとしている。 39. 自分ひとりで、できないことにおつかったとき、気軽にかせいしてくれる。 49. なにか困ったことや、心配ごとにおつかったとき、相談相手になってくれる。 59. 勉強しているとき、テレビやラジオの音を小さくしてくれる。	9. 子どもが何かよいことをしたり、子どもの作ったものがよくできるとほめる。 19. 子どもの味方になる。 29. 家庭を明るく楽しいものにしようとする。 39. 子どもが自分一人ではできないことにおつかったとき気軽にかせいする。 49. 子どもが何か困ったことや心配事におつかったとき相談相手になる。 59. 子どもが勉強しているとき、テレビやラジオの音を小さくする。

- 69. 勉強や遊びで、相手になってくれる。
- 79. かぜなどの病気のとき、やさしくしてくれる。
- 89. わたしのことを信じている。
- 99. わたしと楽しく遊んだり、話したりする。

- 69. 子どもの勉強や遊びの相手になる。
- 79. 子どもが、かぜや病気のときには、やさしくする。
- 89. 子どものことを信じている。
- 99. 子どもと楽しく遊んだり話したりする。

10 Performance (PM)

- 10. 家の中で、あばれたり、さわいだりするとおこる。
- 20. 礼ぎやきまりを守るようにいう。
- 30. おこづかいや、おかねの使い方について、やかましくいう。
- 40. 時間を守るようにきびしくいう。
- 50. よい友だちと遊ぶようにいう。
- 60. 悪いことをすると、きびしくしかる。
- 70. 勉強や、おもちゃのあとかたづけについて、きびしくいう。
- 80. 親のいいつけをきくようにいう。
- 90. 学校の勉強を、もっとよくするようきびしくいう。
- 100. せっかく遊んでいるのに、勉強しなさいという。

- 10. 子どもが家の中であばれたり騒いだりしないようにいう。
- 20. 子どもに礼儀やきまりを守るようにいう。
- 30. 子どもにおこづかいや、お金の使い方についてやかましくいう。
- 40. 時間を守るようきびしくいう。
- 50. 子どもに、良い友達と遊ぶようにいう。
- 60. 子どもが悪いことをしたときはきびしくしかる。
- 70. 子どもにおもちゃや勉強道具の後片付けをするようにいう。
- 80. 子どもに親のいいつけをきくようきびしくいう。
- 90. 学校の勉強をもっとよくするようきびしくいう。
- 100. 子どもが遊んでいるときに、勉強しなさいという。

Maternal Behavior and Attitudes and Elementary School Children's Academic Achievements: An Exploratory Research

Hideo KOJIMA

The subjects included pairs of 165 5th grade children and their mothers. Children responded to a 10-scale inventory, CR-PBI Form 4-A, and mothers to the PR-PBI. Mother-child inter-battery factor structures were rather symmetrical.

Multiple regression analyses were made by taking each of the five achievement measures as a criterion and four demographic indices, ten PBI scales, and child's intelligence as predictors. The achievement measures were grade-point averages at the 1st, 2nd, 3rd, and 4th grades, and a standard test of arithmetic at the 4th grade. Along with intelligence which accounted for a large proportion of the variance, child's age (within a range of 12 months), mother's education, and in some analyses, occupational class of the family all contributed to the child's academic achievements in school. Among the inventory scales, a few which purely measured *Psychological Control* made negative contribution. Some scales of *Acceptance* contributed negatively and some others positively. This finding confirmed the author's argument that reduction of the predictor variables by means of factor analysis may lead to a loss of information in some cases of multiple regression.